追　悼　の　辞

吉岡守行教授は，平成14年2月12日，急逝された。この日は経済学部の入学試験日に当たり，先生は，朝，通勤途上のバスの中で突然の心臓発作で倒れられ，帰らぬ人となってしまわれた。その前日には，文芸学部の入試業務をお元気に遂行され，いつもの少しはにかんだ笑顔でお話ししておられただけに，訃報に接したわれわれには信じがたい思いであった。まことに痛恨の極みである。

その後6月18日に，当時の油井雄二学部長の主導のもと，先生の奥様とお嬢様をお迎えして，学園本部棟において吉岡先生を偲ぶ会を学部として催した。その席では，当時はなおお元気であられた恩師の荒憲治郎先生や，松坂兵三郎名誉教授をはじめ，吉岡先生ゆかりの多くの方々から，心からの惜別の辞や思い出話などを次々と披露していただき，そうしてお一人ずつ語られた哀惜の一齣一齣をとおして，きっと奥様とお嬢様は，学者としての先生が学界や職場で深く尊敬され敬愛されていたことを肌で直に感じ取られたに相違ないと思われたのである。

吉岡先生は，昭和8年2月16日東京のお生まれで，昭和30年3月に早稲田大学第一政治経済学部を，昭和36年3月には横浜国立大学経済学部をご卒業，一橋大学大学院経済学研究科へ進まれ，荒憲治郎教授のゼミナールで理論経済学の研鑽を積まれた。そして修士課程を経て，昭和42年3月博士課程を単位取得退学され，同年4月に本学経済学部に助手として赴任された。その後，44年に専任講師，46年に助教授，52年に教授に昇任され，経済変動論や数理経済学とともに経済原論を担当された。さらに昭和55年には本学大学院経済学研究科経済学専攻の博士課程前期担当，58年以降は同課程後期担当となられ，本学における理論経済学の研究教

育活動の進展に大きく貢献された。

その間，昭和46年9月から1年間アメリカのブラウン大学で客員助教授として実り多い研究の日々を過ごされ，その成果は，昭和52年に，成城大学経済学部研究叢書の1冊として『マクロ経済分析の諸問題』（千倉書房刊）に結実し，学界で高い評価を得ることとなった。その後先生のご研究はさらに発展をとげ，貨幣政策の有効性，国際資本移動，独占・寡占問題，環境問題や税制の経済分析など，マクロ，ミクロを問わず多方面に開拓の鋤を加えられた。数理経済学的方法にもとづく入念で先駆的なそうしたご研究は，なお記憶に新しいオーストラリアでの在外研修を挟んで，今後もますます円熟の度を高められるはずであったことを思うとき，われわれの悲嘆と追慕の念は痛切なるものがある。

先生は，松坂教授のご退任以降は経済原論の担当者として，本学における理論経済学の中核を担われ，また，ゼミナールからも多くの卒業生を送り出された。先生は，立て板に水というわけでは決してなかったけれども，みずから信ずるところを真剣に説き，その誠実さは，まじめな学生の心を動かさずにはおかなかったはずなのである。そして，学内行政面においても，経済学科主任や大学院の経済学専攻主任としてご尽力くださり，学部と大学院の発展のために大いに寄与された。

本学経済学部教授会は，先生を追慕し，多年にわたるご功績に深い感謝の気持ちを表したいと考え，経済学会誌『成城大学経済研究』第163号を『吉岡守行名誉教授追悼号』として先生に捧げることを決定した。この企画に対して，吉岡先生の最も親しい学友として奥口孝二教授，鴇田忠彦教授が，また，かつて先生の親身の指導を受けられた吉川卓也氏，海野洋一郎氏が快く賛同され，それぞれ入魂のご論攷をお寄せくださった。さらに，中川和彦，信岡資生両名誉教授からも吉岡教授追悼の玉稿を賜ることができた。心からあつくお礼を申し上げたい。

こうして，本学経済学部の多くの同僚諸氏によるご寄稿というご協力も

得て，ここに浩瀚な追悼論文集を上梓する運びとなったが，それは生前の吉岡先生の真摯なお人柄に寄せる多くの方々の敬慕の想いの結晶にほかならない。そして，ご経歴・ご業績のとりまとめを含め，先生に捧げるのに恥ずかしくないものに仕上げるについては，小平裕教授をはじめとする編集委員会の諸教授の大きなご尽力に負っていることを特記しておかねばならない。

吉岡先生の突然の早すぎる旅立ちについて，われわれの落胆と無常感は甚だ大きく，とりわけご家族のお気持ちを拝察するとき，痛恨の念は切なるものがある。しかし，ここはそのことについて多くを語る場所ではない。一人一人が生前の先生を偲び，先生に語りかけ，そっと胸にしまっておくべきことのように思われるからである。長年にわたって研究室の隣人というご縁に連なるさまざまな想い出を頂戴したわたくしにとっては，そのような感慨が深いのである。今は，本学における理論経済学の屋台骨を担われた先生の大きなご貢献にあらためて深い感謝の気持ちを捧げ，御霊の平安をお祈り申し上げたいと思う。

平成 15 年 11 月

経済学部長・経済学会長
木　村　周 市 朗